

先日、自宅前にあつた大正時代築の土蔵を解体しました。長らく足を踏み入れていなかったため、解体前に内部を確認したところ、処分品が大半を占める中で、まず目を引いたのは、大量の輪島塗と思われる御膳セットでした。木の箱に収められ、表には筆で「明治何年」と記されており、その歴史を感じさせました。手放すことを躊躇しましたが、幸いにも旧知の友人に引き取ってもらうことができました。次に、黒い長持ちに入つた大量の座布団が出てきました。こちらにも状態の良いものを選んでもらい、友人に譲ることができました。その他にも、数え切れないほどの食器が出てきました。

かつては冠婚葬祭やお盆、正月など、自宅に多くの人々が集まる機会が頻繁にあり、そのため我が家にも大人数に対応できる品々が揃っていました。しかし、現代ではそのような機会は稀です。これも時代の変化とともに、家に求められる機能が変化してきたことの表れだと感じます。それでも、お盆や正月に親族が一堂に会するご家庭は、まだまだ多いことでしょう。

先日、仮設住宅にお住まいの方から、お話を伺う機会がありました。その方は、『たまに子どもや孫が帰省しても、仮設住宅では一緒に泊まることすらできないのが非常に寂しい』と仰っていました。「せめても一部屋あれば助かるのに」という切実な声は、深く心に響きました。仮設住宅では、国の基準で入居人数に応じた部屋数や広さが制限されており、これは今後建設される復興住宅も同様です。震災で家を失うだけでなく、親族と過ごす時間まで奪われ、ひいては故郷への愛着までもが失われるのであれば、一体何のための復興なのでしょうか。

これからの復興においては、こうした被災者の声を国や県に伝え、住まいが単なる箱ではなく、家族の絆を育む場であり続けられるよう働きかけていく必要があると強く感じています。